

Miyagi University Research Journal

新型コロナウイルス感染症（Covid-19）拡大下における 基礎看護学実習（第Ⅰ段階）の取り組み

Effort of a New Fundamental Nursing Practicum I Program during the Spread of the Coronavirus Disease 2019 Pandemic

竹本由香里, 勝沼志保里, 木村眞子, 大橋幸恵, 相澤美里, 桑名諒

Yukari Takemoto, Shihori Katsunuma, Naoko Kimura,

Yukie Ohashi, Misato Aizawa, Ryo Kuwana

宮城大学看護学群

School of Nursing, Miyagi University

【キーワード】

基礎看護学実習, 新型コロナウイルス, ハイブリッド型学習

Fundamental Nursing Practicum, Covid-19, Hybrid Learning

【Correspondence】

竹本由香里

宮城大学看護学群

takemotoy@myu.ac.jp

【COI】

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

Received 2021.6.11

Accepted 2021.8.11

Abstract

Background: Due to the condition of health-care facilities in relation to the coronavirus disease 2019 (COVID-19) pandemic, the fundamentals of nursing practicum program (phase 1) for fiscal year 2020 were reduced from 3 to 1 out of every 5 days. This study describes our challenges in maintaining the program despite the reductions in clinical hours and clinical exposure.

Objective: To report nursing students' experiences and the effectiveness of our new practicum program.

Activities: We introduced blended learning methods to achieve the learning objectives. First-year nursing students who were experiencing clinical placement for the first time participated in a new program consisting of two parts. The first part was on-site learning, in which an online orientation session was live-streamed from hospitals and nurse shadowing took place in a clinical setting. The second was off-site learning consisting of communicating with and assessing a simulated patient with vertebral compression fracture, and then planning and implementing care. The off-site learning part was based on the case method and assessed based on student presentations, discussions, and peer reviews.

Activity evaluations: The students successfully obtained a clearer understanding of their respective challenges by reflecting on their own communication styles and practices and the feedback they received from others. Furthermore, by enabling students to have plentiful opportunities to hold discussions and share acquired knowledge, the positive effects of community learning were revealed.

Conclusion and issues: The results of this study suggest that blended learning methods can reduce the impact of limited clinical exposure in nursing education. In the future, students should be given an opportunity to assess the practice program and learning outcomes objectively.

Miyagi University Research Journal

はじめに

2019 年 12 月に中華人民共和国で確認された新型コロナウイルス感染症（以下、Covid-19）は全世界に拡大し、人々の生活に大きな影響を及ぼした。日本でも 2020 年 4 月に緊急事態宣言が発出され、本学も 2020 年度前期は全科目において完全遠隔授業となった。しかし、後期からは大学構内の感染対策を講じて対面授業が再開され、基礎看護学関連科目でもナースングラボ内の換気や環境清掃により演習環境を整え、学生数の分散、サージカルマスク着用を徹底しながら技術演習を行ってきた。

看護基礎教育において、臨地実習は重要な科目として位置づけられている。看護教育の各々の段階において実習内容はさまざまであるが、この臨地実習において学生は学内で習得した知識や技術を用いて患者や家族または他の医療関係者と関わり、さまざまな反応を得、人間関係を深めながら実習していくことになる [1]。中でも基礎看護学実習は学生が初めて経験する臨地実習であり、成人看護学や老年看護学などの各看護学の基盤となる基礎的な知識や技術を学ぶ実習である。さらに、基礎的な知識・技術の修得だけではなく、看護学を学ぶ動機づけを図る上でも重要な科目である。しかし、Covid-19 の感染拡大下では多くの教育機関で実習施設の確保が困難となり、実習計画の変更を余儀なくされた。2021 年 2～3 月に計画されていた本学の基礎看護学実習（第 I 段階）も実習施設の確保ができず、従来の実習プログラムでの実施が困難となった。

厚生労働省は、2020 年 6 月 22 日に「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について」の事務連絡を発出した。実習施設において学生の受入れが可能となった場合の実習計画について、「対象との関係構築のためには、臨地における連続した実習時間の確保が望ましいが、実習施設の状況により困難な場合は、臨地での実習の前後に、学内において対象の理解を深めるような演習を実施するなど、臨地に滞在する時間が短縮されても学修目標が達成されるよう計画すること。」 [2] が記されている。

このような状況から、当初計画していた学修目標が達成されるように 2020 年度基礎看護学実習（第 I 段階）は学内でのリアルタイム型オンラインによる病院オリエンテーション、模擬患者（Simulated Patient, 以下 SP とする）とのコミュニケーション実習、看護援助実習と病院でのシャドウイング実習を組み合わせた 5 日間のハイブリッド型実習として展開した。ハイブリッドとは複数のものを組み合わせるという意味を持ち、看護基礎教育において、フィジカルアセスメントの状況設定演習でハイブリッド・シミュレーション教育を取り入れた報告 [3] はあった。看護学実習では Covid-19 の拡大により医療機関等での臨地実習が制限される中、多くの教育機関が実習方法を検討し、ハイブリッド型看護学実習の取り組みが報告されるようになった [4]。しかし、ハイブリッド型実習の取り組みは始まったばかりであり、実習方法の組み合わせも様々である。今後、それぞれの実習から得られた知見を蓄積していくことで、より効果的な教育方法を検討するための資料となり得ると考える。

目的

Covid-19 拡大下、ハイブリッド型実習として取り組んだ基礎看護学実習（第 I 段階）の展開と実際を報告し、今後の効果的な看護学実習の教育方法を検討するための資料とする。

2020 年度基礎看護学実習（第 I 段階）の展開と実際

1. 実習目的

看護の対象となる入院患者の療養生活に関わり、看護の視点から患者に実践されている看護援助の意義を考察する。患者への看護援助の体験を通して、看護専門職としての基本的な態度を省察し、今後の学修姿勢の基盤を形成する。

2. 実習概要（表 1）

本実習は看護学生 1 年生が履修する実習である。実習目的・目標、実習時間数を変更せずに

実習形態を検討した。従来は、学内実習2日間、病院実習3日間で行い、学生1名が入院患者1名を受け持つ予定であった。今回は、学生全員が病院実習を1日以上経験する、患者とのコミュニケーションについて学ぶ、看護援助の個別性を学ぶことを主軸として実習内容と方法を変更した。

表1 基礎看護学実習（第Ⅰ段階）実習概要（内容対比表）

実習目標	従来の実習内容	ハイブリッド型実習内容
1. 患者またはその家族とのコミュニケーションや看護援助の体験を通して、看護援助を考察することができる。	・病院、病棟オリエンテーション ・受け持ち患者とのコミュニケーション ・受け持ち患者の情報収集とアセスメント ・受け持ち患者の看護援助計画の立案 ・受け持ち患者に行われている看護援助の見学または実施	【学内】紙上事例の活用 ・リアルタイム型オンラインによる病院オリエンテーション ・SPとのコミュニケーション実習 ・看護援助実習 【病院】 ・病棟オリエンテーション ・シャドウイング実習
2. 患者の生活援助のための基礎的な看護援助技術を原理・原則をふまえながら、見学もしくは実施できる。	・受け持ち患者の看護援助計画の立案 ・受け持ち患者に行われている看護援助の見学または実施	【学内】紙上事例の活用 ・看護援助実習 【病院】 ・シャドウイング実習
3. 看護専門職としての基本的な態度を身に着ける。	・診療記録、実習記録の管理 ・プライバシーの保護 ・教員、指導者への報告、連絡、相談 ・グループでの協働活動 ・問題解決行動 ・健康管理（健康管理表の記録）	【学内】紙上事例の活用 ・SPとのコミュニケーション実習 ・看護援助実習 【病院】 ・シャドウイング実習

3. 実習内容・方法

履修学生は102名で、3クールに分けて実習を行った。5日間のプログラムを表2に示す。学生は1グループ5～6名で構成し、A・Bの2グループに分かれて実習2日目と3日目にそれぞれ1日の病院実習を行った。病院実習以外は、学内の講義室とナースングラボで実施した。

今回の実習では入院患者を受け持ち関わるができなかったため、実習目標を達成するために看護技術論（1年次後期科目）で使用した紙上事例を受け持ち患者として設定した。実習1日から4日目にかけて1度授業で行っている情報整理・アセスメントを見直すことで、学生の看護過程の理解を深めることをねらいとした。

表2 基礎看護学実習（第Ⅰ段階）プログラム（ハイブリッド型実習）

	実習1日目	実習2日目	実習3日目	実習4日目	実習5日目
Aグループ	リアルタイム型オンラインによる病院オリエンテーション	シャドウイング実習（病院）	SPとのコミュニケーション実習	看護援助実習	学びのまとめ 全体発表会
Bグループ		SPとのコミュニケーション実習	シャドウイング実習（病院）		

1) リアルタイム型オンラインによる病院オリエンテーション

実習1日目に実習病院看護部と遠隔会議システム（zoom）を用いて、病院オリエンテーションを学内講義室で実施した。病院側の映像はプロジェクターに映し、大学側のパソコンは学生を映すように設置した。オリエンテーションは実習病院から一方向の情報伝達スタイルではなく、学生からの質問も受け付け、学内講義室からも発言できるように実習病院と学生が双方向のコミュニケーションをとることができるようにした。

2) シャドウイング実習

今回は病院実習が1日となったため、看護師の看護実践の見学を通して実習目標を達成できるようにシャドウイング実習とした。シャドウイング実習では、1名の看護師に1～2名の学生が同行し、看護師の活動の実際を見学するだけでなく、状況に応じて看護師とともに看護援助を行うことができるように打ち合わせ会議において実習病院と調整した。

3) SPとのコミュニケーション実習（表3）

Miyagi University Research Journal

病院実習をシャドウイング実習としたため、学生は受け持ち患者と関わり、コミュニケーションをとるという機会がなくなった。そのため、受け持ち患者への挨拶、情報収集のためのコミュニケーション、受け持ち患者の情報を申し送りから聞くという体験をすることができるよう、SP とのコミュニケーション実習を行うこととした。コミュニケーション実習のプログラムを検討する上で考慮した点は、学生と面識のない SP を依頼すること、臨地実習で学生が体験する状況を再現することであった。可能な限り従来の臨地実習と同じ体験ができるように SP の選定を行い、3 つの場面を設定した。

学生は必ずいずれかの 1 場面を実施し、他のグループメンバーは観察者として実施学生の行動や言動、模擬患者の反応を観察した。また、場面②では途中で患者から「車いすを持ってきてトイレまで連れて行ってほしい。」と発言してもらうこととした。このねらいは、患者からの依頼があった場合の対応を学ぶことである。1 場面ごとに実施者の自己評価と、SP・観察者からのフィードバックを発表し、各場面のねらいに沿って振り返りを行った。

表 3 模擬患者とのコミュニケーション実習プログラム

コミュニケーション実習の目標	
1. 基本的なコミュニケーション技術を修得することができる。 2. 初めて会う受け持ち患者に自己紹介をすることができる。 3. 申し送りで得た情報を活用して患者の状態を確認することができる。 4. 教員に連絡・相談・報告することができる。	
内 容	方 法
1. 胸椎圧迫骨折で入院している平泉幸子さん（70 歳・女性）を入院 5 日目から受け持ち、場面①～③の状況でコミュニケーションをとる。 2. 平泉さんに関する情報（病状、安静度、ADL の状況等）は病棟指導者から説明を受けた後である。 <u>場面① 受け持ち開始の挨拶</u> （受け持ち患者と初めて対面し、患者との関係性を構築するためベッドサイドでコミュニケーションをとる場面） <u>場面② 患者とのコミュニケーション</u> （患者との関係構築を促進し、患者に関する情報を得ることを目的としたコミュニケーションをとる場面） <u>場面③ 計画している援助の説明</u> （病院実習 2 日目で、朝の挨拶と清拭・寝衣交換の援助を行うための説明と同意を得るために病室を訪れた場面）	1. 看護技術論で看護過程を展開した平泉幸子さんの事例と作成した記録を読み、患者の状態を確認しておく。 2. 各場面の設定は次のとおりである。演習時間は一人あたり 10～15 分とする。 ・場面① 病院実習初日 10 時頃に教員とともに患者のベッドサイドに行き、自己紹介を行う。その後、教員はベッドサイドを離れるが学生はそのまま残り、患者と関係性を構築することを目的としたコミュニケーションをとる。 ・場面② 実習初日の午後に、情報収集を目的としたコミュニケーションをとるために一人で病室に行く。病室に行く前には、教員に自分の所在を明らかにするための報告を行う。（患者は膀胱留置カテーテルを抜去したばかりである。） ・場面③ 朝の申し送りに参加した後、朝の挨拶と計画している清拭と寝衣交換を行うための説明と同意を得るために病室を訪れる。申し送りでは、昨夜から今朝までの患者の情報が伝えられる。 3. 自分が担当する場面以外では、観察者として患者と学生の様子を観察し、気づいた点（言葉遣いや態度・患者や学生の表情・患者についてわかったこと・よかったところ・気になったところなど）を観察記録用紙に記載する。 4. 各場面が終了した後に 20 分程度の振り返りを行う。振り返りでは、学生・観察者・患者からそれぞれの立場で感じたことや考えたことを発表し、各場面に応じたコミュニケーションの取り方について話し合う。

Miyagi University Research Journal

4) 看護援助実習

紙上事例に対し、SPとのコミュニケーション実習で得た情報を追加しながら、援助を必要としているニーズを明確にし、そのニーズを満たすための看護援助を計画して実習4日目に実践・評価する内容とした。看護実践場面での患者役は、援助内容により学生またはモデル人形とした。看護援助は学生一人で行うことを基本とし、他のグループメンバーは観察者として実施学生の行動や言動、患者役の反応を観察した。グループメンバー全員の実施が終わった後に、実施者の自己評価と観察者からのフィードバックを発表し合い、看護援助の振り返りを行った。

5) 学びのまとめ

実習最終日に「実習で見学・実施した看護援助の意義」をテーマにグループディスカッションを行った。グループディスカッション後に、各グループで話し合った内容をまとめた資料を書画カメラに映して全体発表を行った。全体発表は1グループの発表8分、質疑応答5分で行い、進行は学生が担当した。

6) カンファレンステーマ

カンファレンステーマは、実習プログラムに沿ってあらかじめ設定した。実習1日目のテーマは、グループで活動する時間が増えることから「チームメンバーとの協働について」とした。シャドウイング実習のテーマは「患者の療養環境について」、SPとのコミュニケーション実習のテーマは「患者とのコミュニケーションについて」、紙上事例への看護援助実習のテーマは「看護援助について」とした。

4. 実習プログラムの実際

1) リアルタイム型オンラインによる病院オリエンテーション

実習施設との事前打ち合わせで、看護部教育担当者と方法を調整して実施した。オンラインによる病院オリエンテーションは、2020年8月に実施した基礎看護学実習（第Ⅱ段階）でも遠隔会議システム（zoom）を用いた方法を導入していたため、調整もスムーズであった。通信状況等により音声の一部途切れたり、音量の調節に不具合が生じた場面もあったが、学生たちは熱心にメモを取りながらオリエンテーションを受けることができていた。学生からの質問を受け付けた際には、学生はパソコンの前に移動して直接自分の言葉で質問をすることができた。

2) シャドウイング実習

シャドウイング実習では、状況によって変更はあったが基本的に看護師1名に学生1名が同行し、看護師の看護実践の場面を見学することができた。Covid-19拡大下では、学生もあらゆる場面で手指衛生、マスクやエプロン、ゴーグルなどの个人防护具の着用を実際に行い、臨床場面での感染対策を実践することができた。他にも入院患者への清拭や車いす移送、食事の配膳、血圧測定など既習の看護援助の一部を体験した。実習2日目にSPとのコミュニケーション実習を行ってからシャドウイング実習に臨んだ学生は、看護援助に参加して患者に話しかける際には、SPとのコミュニケーション実習の振り返りを活かし、声の大きさや患者との距離、目線の高さなどを意識するようにしたと話していた。

学生は、看護師が行っている看護実践に対し疑問に思ったことを質問したり、看護師から行為の目的や意図の説明を受けることで、患者によって看護師の関わりが変化していることに気づき、看護師の行動の意味を考えることができていた。しかし、「患者の療養環境について」というカンファレンスでは、病室やベッド周囲の環境に関する具体的な発言が少なく、教員からの環境を想起させるための発問が必要であった。

3) SPとのコミュニケーション実習

コミュニケーション実習は学生が日常的に使用しているナースングラボで実施したが、SPが学生の前に現れた時から緊張した面持ちとなり、「本当の患者さんですか。」「緊張する。」という声が聞かれた。学生は既習のコミュニケーション技術に関する知識を活用してSPとのコミュニケーションを実践していた。設定した3つの場面を通して、初対面の人と話す難しさを語る一方で、「患者さんがいろいろ質問してくれたので話しやすかった。」という反応もあった。観察者となった学生からのフィードバックでは、患者との距離や声の大きさ、目線の高さ、表情、聞かれた質問、閉じられた質問など

Miyagi University Research Journal

の基本的なコミュニケーション技術や言語的・非言語的コミュニケーションについて客観的に観察した内容が伝えられた。また、SP からのフィードバックがあることで、患者の気持ちや視点を知る機会となった。実習 2 日目にシャドウイング実習を行ってから SP とのコミュニケーション実習に臨んだ学生は、病院で看護師が患者と話すときの様子を参考にして、声のかけ方や情報をとる時の質問の仕方を工夫したと話し、振り返りにおいて見学した場面を取り上げて意見を発表していた。各場面の振り返りでは、実施者・観察者・SP それぞれの立場からの意見が発表され、講義で学んだ基本的知識を実践に活用することの重要性をグループメンバーと共有し、自己の課題にも気づくことができていた。

SP から車いすまでトイレまで移送することを依頼された場面では、教員や看護師に報告するという対応を取った学生が大半であったが、報告や相談がなくトイレまで移送する対応を取った学生もいた。この場面では、インシデント・アクシデントにつながる可能性があること、なぜ報告や相談が必要なのかをグループで意見を出し合い、振り返ることができた。

4) 看護援助実習

学生が実施した看護援助は、清拭、手浴、足浴、洗髪などの清潔援助、車いす移送、トイレでの排泄介助等であった。今回の実習では、技術演習で行った方法をそのまま実施するのでは患者の個別性を捉えることにはならず、ADL の評価や心理面についてアセスメントしながら具体的な援助計画を立案して実施した。援助計画を検討する際には、シャドウイング実習において看護師が患者個々の状態に合わせて援助していた場面をグループ内で共有していた。

看護援助は原則として 1 人で準備から後片付けを制限時間内に実施することとしていたが、物品の準備や援助計画に具体性がないことで、時間内に終えることができない学生もいた。しかし、落ち着いた環境下で学生一人一人が実践する時間を確保し、患者役または観察者となった学生からのフィードバックがあったことで、患者の安全・安楽を考慮して援助すること、事前の説明から反応を確かめるためのコミュニケーションの取り方、看護援助の目的の達成度などを振り返ることができた。また、準備から後片付けまでの一連の流れを体験し、自身の技術の未熟さだけでなく、スムーズに実践するためには援助計画を詳細に検討することが必要なこと、一人で援助を実践することの責任、自己の課題についても気づくことができた。

考察

1. ハイブリッド型実習としての取り組み

日本看護系大学協議会の調査 [5] では、日本看護系大学協議会会員校 247 校の 2020 年 9 月以降に開講予定の実習開講科目 2,140 科目のうち、83.4% が変更有となっていたと報告している。本学の基礎看護学実習（第 I 段階）でも一部の施設で実習を行うことが困難となったため、従来のプログラムを変更し、複数の実習プログラムを組み合わせたハイブリッド型実習として展開した。

ハイブリッド型授業には「ハイフレックス型」「分散型」「ブレンド型」の 3 類型 [6] があるが、本実習は実習 2 日目と 3 日目に 2 つの実習プログラムを実施する学生が両方存在する「分散型」に該当する。分散型は、実験や実習のように対面での授業に必ず学生を参加させたいにもかかわらず、全員の学生を一度に受け入れる環境が整わない場合に取得する方法である。本実習も実習施設が限定されたことから、この分散型を取り入れて展開した。

分散型実習の課題の一つとして、学生によって実習プログラムの順序が異なることがある。本実習でも、SP とのコミュニケーション実習を先に行うグループと、シャドウイング実習を先に行うグループの 2 パターンが存在した。SP の導入は、再現可能かつリアリティに近い学習状況を創り出すため、患者に関わる以前の、段階的かつ実践的学習を促進する教育方法としても期待されている [7]。SP 参加型の学修を経験した学生は、患者とのコミュニケーションにおいて自分の立つ位置や話しかける言葉まで詳細に準備し臨床実習に臨んでいたことが報告されている [8]。また、古村ら [9] は、実習前に SP の演習を行ったことで、学生は実習において対象と積極的な姿勢でコミュニケーションをとることができていたと報告している。本実習でも先に SP とのコミュニケーション実習を行った学生

Miyagi University Research Journal

は、同様の準備をしてシャドウイング実習に臨んでいたと考えられた。患者と直接関わることでできる病院での実習を効果的な学びの場とするには、学生の準備性を高め、積極的な姿勢で患者と関わるができるようSPとのコミュニケーション実習を先に行うプログラムが望ましいと考えられた。

一方、先にシャドウイング実習を行った学生は、SPとのコミュニケーション実習において既習の知識を活用するだけでなく、病院で見学した看護師の患者との関りを意識し、実習に臨んでいた学生もいた。病院で直接患者に関わるための準備性を高めるという点においては、リアリティに近い学習状況を経験してから病院での実習に臨むことはできなかった。しかし、SPとのコミュニケーション実習を行う時には、実際の臨床場面を見学したことで具体的なイメージを持ちながら実践することができ、振り返りの場面でも見学した看護師の言動と比較しながらリフレクションすることができたと考えられる。

このように、分散型のハイブリッド型実習を取り入れる場合は、組み合わせる個々のプログラムの目的・方法を検討するだけでなく、順序性も考慮したプログラム全体を通しての学習効果についての検討が必要であった。順序が異なる場合でも、先に実施するプログラムで得ることのできる学びを次のプログラムにどのようにつなげるか、そのねらいを意識することで各プログラムの目的・目標をより明確にすることができる。また、学生に目的・目標として提示するだけでなく、日々のカンファレンスにおいて学生が得た学びを次につなげることができるような教員の関りも重要になってくると考える。今後、分散型のハイブリッド型実習を実施する際には、各プログラムの実施順序から得ることのできる学習効果も踏まえ、全体プログラムを検討していくことが必要と考える。

2. 今回のハイブリッド型実習における学びの特徴

従来の実習では、3日間を通して学生はそれぞれ異なる患者1名を受け持ち、コミュニケーションをとり、情報収集しながら看護援助を計画し、実施していた。毎日30分程度のカンファレンスを設け、互いの学びを共有する機会はあったが、他の学生が患者とどのように関わり、どのような援助を行っているのかを見る機会はほとんどなかった。つまり、実習はグループ単位で行われるが、実習期間の半分以上は個で活動し、多くは指導者や教員から個別的教育支援を受けて学習を進めていた。今回のハイブリッド型実習では、シャドウイング実習以外のプログラムは、学生全員が同じ事例を受け持ち患者として実習を展開した。SPとのコミュニケーション実習、看護援助実習のすべての場면을共有し、実施者以外は観察者となって互いによかった点や改善点、行動の意図についての質問などを発表しながら事例患者との関わりを振り返った。

藤尾ら[10]は、臨地実習において学生同士が互いに及ぼす影響の特徴について文献研究を行い、双方向の影響というものがあることが学生同士の変化・成長を高めていく関係性であることを報告している。小児看護学実習においてペアで子どもを受け持ち実習することについては、【学習に対するモチベーションの向上】【ケアの質の向上】【相談できることによる精神的な負担の軽減】【情報量や気づきの増加による深い対象理解】などが学生自身の評価として報告されている[11]。今回の実習では同じ事例患者を受け持ちとしたことで、互いのよいところを参考にし、同じ状況を体験するために相談することができる、異なる視点から意見交換ができるなど、双方向に影響し合い、学ぶことができたと考えられる。

大学教育において「実践共同体」とは、自分たちの活動の意味や目標、役割などについての共通理解を持つ者が共に実践を行う集まりのことである。実践共同体への参加による学びという考え方は、知の形成が、単なる知識の伝達-受容の過程ではなく、成員の協働的活動による状況・関係性により生じるものとしてとらえられている[12]。従来の実習形態によるグループも、同じ実習目的・目標のもとに実践を行う実践共同体ではあった。しかし、個々の学生が受け持つ患者は異なり、共通の課題（同じ受け持ち患者への看護）について双方向に影響し合う機会は少なかったと考える。今回は病院での実習時間が短縮されたが、学生たちが日常的に過ごしている学内という安心できる環境の中で、同じ受け持ち患者への個々の看護実践について話し合う時間を十分にとることができた。各実習プログラムの目的・目標が明確であり、指導者や教員からの教育支援という知識の伝達を受容するだけではない、メンバー同士の協働的な活動が学生の学びを深めたと考える。

3. 今後の臨地実習の在り方について

臨地での実習時間を短縮することを余儀なくされ、そのような状況の中でも学生の学習成果を保証

Miyagi University Research Journal

すべく実習プログラムを検討した。病院という環境に身を置き、患者や家族、医療従事者と直接関わることでしか学ぶことのできないことは多い。しかし、Covid-19 の感染拡大によりはからずも臨地実習の在り方について検討する機会となった。これまでは臨地で実習を行うことが当たり前の考え方があったが、安全性、再現性のある SP 活用の学習効果や実践共同体として学習することの効果を確認することができた。

Covid-19 の感染拡大により、多くの教育機関が臨地実習の在り方について検討し、新たな教育方法にも着手した。バーチャル・シミュレーションを用いたハイブリッド型実習 [4] や、遠隔形式によるシミュレーション実習 [13] の評価や課題についての報告がある。米国では、臨床実習時間の最大 50%まではシミュレーションに置き換えても学習成果は変わらないことが報告されている [14]。日本看護系大学協議会による調査 [5] では、単発ではなく、継続的に臨地実習の在り方を考える必要があるとの意見もあった。このようなことから、実習目的・目標の達成に向けてより効果的な教育方法や柔軟な実習プログラムを検討していくことが必要であろう。

おわりに

本報告は、Covid-19 感染拡大により創られた実習プログラムによる基礎看護学実習（第I段階）の教育実践報告であった。分散型によるハイブリッド型実習としての取り組み、学びの特徴、臨地実習の在り方について考察したが、学生による客観的評価もふまえて検討していくことが必要である。

今後も臨地でしか学べないこと、学内実習の方が効果的な内容を精査しながら、学生の学びを深め促進する教育方法について検討していきたい。

Acknowledgement

Covid-19 感染拡大の中、対策を講じ基礎看護学実習を受け入れてくださった医療機関の皆様へ深く感謝申し上げます。

すべての著者が論文の作成に関与し、最終原稿を確認した。

文献

- [1] 松本光子監修, 看護学臨地実習ハンドブック-基本的考え方とすすめ方-, 金芳堂, 2017: p.9-10
- [2] 厚生労働省, 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について, 2020 年 6 月 22 日 <https://www.mhlw.go.jp/content/000642611.pdf> (2021/6/1 確認)
- [3] 永田明恵, 松田明子, 状況判断能力の育成を目的とした状況設定演習にハイブリッド・シミュレーション教育を取り入れた演習展開の実践と課題, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 2018. 14: p.109-115
- [4] 益田美津美, 小田嶋裕輝, バーチャル・シミュレーションを用いたハイブリッド型成人看護学実習の取り組み, 医学教育, 2020. 51 (5): p.557-560
- [5] 日本看護系大学協議会, 日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書, 2021 年 4 月 <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyouaAB.pdf> (2021/6/3 確認)
- [6] 田口真奈, <センター教員・共同研究論考>授業のハイブリッド化とは何か—概念整理とポストコロナにおける課題の検討—, 京都大学高等教育研究, 2020. 26: p.65-74 (<http://hdl.handle.net/2433/261207>) (2021/7/9 確認)
- [7] 本田多美枝, 上村朋子, 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察: 教育の特徴および効果, 課題に着目して, 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, 2009. 7: p.67-77 (<http://doi.org/10.15019/00000259>) (2021/6/2 確認)
- [8] 加悦美恵, 基礎看護学における SP 参加型の授業と臨地実習の連携, 日本看護学会誌, 2006. 26 (2): p.68-75
- [9] 古村美津代, 木室知子, 中島洋子, 老年看護学教育における模擬患者導入の臨地実習への影響, 老年看護学, 2009. 13 (2): p.80-86
- [10] 藤尾麻衣子, 藤谷章恵, 大武久美子, 香春知永, 臨地実習において学生同士が互いに影響を及ぼす影響に関する文献, 武蔵野大学看護学研究所紀要, 2018. 12: p.31-39 (<http://id.nii.ac.jp/1419/00000743/>) (2021/7/9 確認)
- [11] 林亮, 齊藤麻子, 石井くみ子, 川口千鶴, 西田みゆき, 小児看護実習におけるペア実習に対する学生の評価, 順天堂大学保健看護研究, 2018. 6: p.34-41
- [12] 杉原真見, 大学教育における「学習共同体」の教育学的考察のために, 京都大学高等教育研究, 2006. 12: p.163-170 (<http://>

Miyagi University Research Journal

hdl.handle.net/2433/54177) (2021/6/4 確認)

- [13] 齊藤奈緒, 霜山真, 菅原亜希, 松永雄至, *2020 年度総合実習（成人）における遠隔形式によるシミュレーション実習の展開と評価*, 宮城大学研究ジャーナル, 2021. 1 (1) : p.98-106 (doi/10.15085/00000706)
- [14] Hayden, J.K., Smiley, R.A., Alexander, M. et al, *The NCSBN National Simulation Study: A Longitudinal, Randomized, Controlled Study Replacing Clinical Hours with Simulation in Prelicensure Nursing Education*. Journal of Nursing Regulation, 2014. 5 (2) :S3-S40